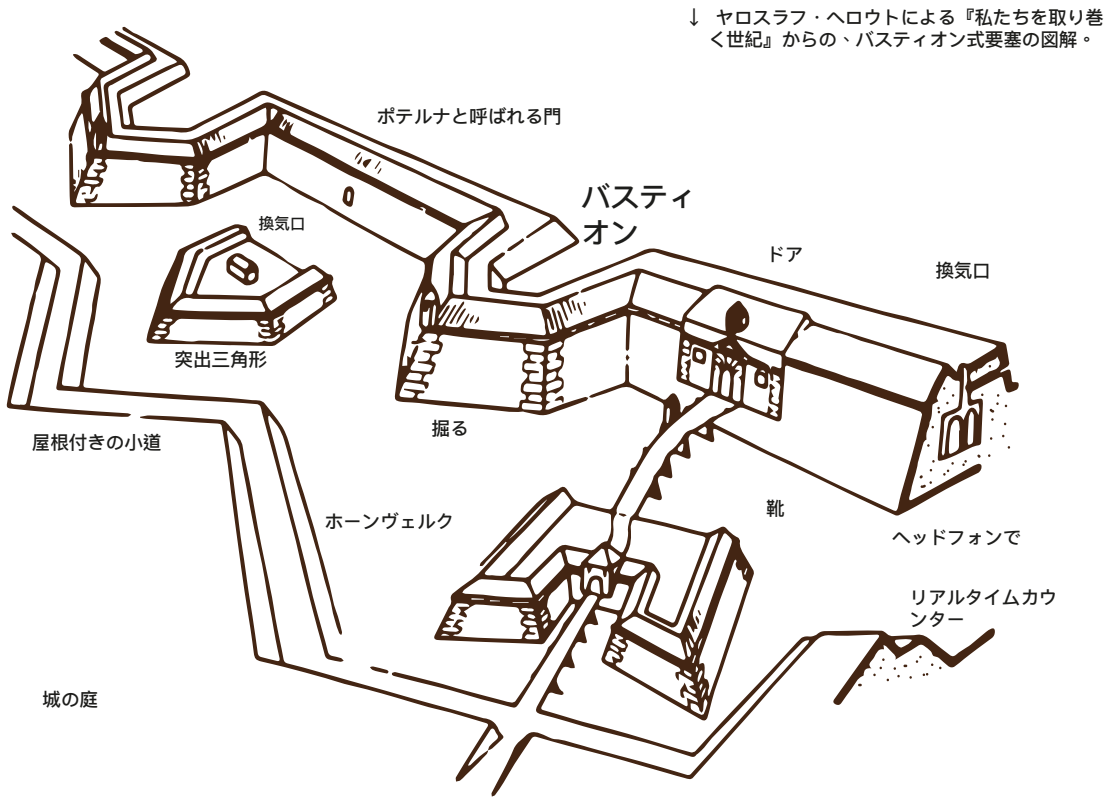


バ스티オン



バ스티オン式要塞は、主に16世紀から18世紀にかけて用いられた要塞建築の手法であり、バ스티オン（稜堡）とカーテンウォール（城壁）を相互に配置する構造を特徴としています。この概念は、15世紀末から16世紀初頭にかけて、アペニン半島において成立しました。チェコ共和国における重要なバロック様式の稜堡式要塞としては、シュピルベルク要塞のほか、とりわけボヘミア地方に位置するヨゼフ要塞およびテレジーン要塞が挙げられます。スロバキアには、かつての要塞であるレオポルドフ要塞が残されています。

バ스티オン（稜堡）とは五角形の要塞構造であり、そのうち二つの側面は先端が城の堀へと突き出す形で設けられています。カーテンウォールとは、射撃陣地と射撃陣地の間に位置する、要塞城壁の直線部分を指します。バ스티オンからは側射および斜射が行われ、一方、カーテンウォールからは正面射撃が行われました。さらに、防御のための諸要素は、堀の内部やその前方の外郭地帯へと、より前進した位置に設けられることもありました。この要塞化の手法は、ヨーロッパ各地の複数の築城工学の学派において発展してきました。



↑ 南西の棒の内側。存在。

バ스티オンは、守備側の射手や大砲を過度に危険にさらすことなく、城壁の基部に接近する敵を射撃することを可能にし、同時に隣接するバ스티オンを支援する役割も果たしました。バ스티オンからの側射および斜射は、隣接するカーテンウォールを防御する役割を果たしていました。

シュピルベルク要塞の西側における初期バロック様式の要塞化施設の建設は、三十年戦争の時期にさかのぼります。モラヴィアの首都ブルノは、重要な地方行政機関の所在地であると同時に、ウィーンの軍事的前進拠点でもあり、敵からの直接的な脅威に直面していました。1630年代には、要塞の建築的な状態は深刻であり、特にシュピルベルク要塞の西側、ウーヴォズ方面においてその状況が顕著でした。同時代の史料によれば、この側のカーテンウォールは極めて荒廃しており、馬に乗ったままでも登ることが可能なほどであったとされています。およそ1639年頃、この側において再建工事が開始される予定となっていました。これには、カーテンウォールの修復、バ스티オンの建設、そしてラヴェリン（城の堀内に設けられた独立した稜堡）の築造が含まれていました。しかし、実際に建設が開始されたのは、1643年から1645年にかけてスウェーデン軍が到来した時期であった可能性が高いと考えられています。この要塞化施設は、城への入口にあたる西側を防衛することを目的として設けられました。

南西バ스티オンの建設は、1643年から1645年の間に開始された可能性が高いとされています。歴史資料では、この建造物は「新バ스티オン」または「ペローニ・バ스티オン」と呼ばれています（ジローラモ・ペローニは、建設に関与した可能性が高い重要なイタリア人軍事技術者でした）。南西バ스티オンの建設と並行して、副次的な北西バ스티オンも築造されたと考えられています。これら二つの新しい四角形のバ스티オンはいずれも、斜め方向に先端を突き出す形で設けられていました。両バ스티オンの側面は、より高い煉瓦造のカーテンウォールによって結ばれており、この城壁は、より低いルネサンス期のカーテンウォールの上に重なる形で築かれていた可能性があります。このカーテンウォールの前方、ウーヴォズ側には堀が設けられ、そのさらに前面には未完成のラヴェリンが位置していました。

現在見られる地下空間の姿は、三十年戦争後、バ스티オンが修復および改修された時期にさかのぼります。ここには、周囲回廊（いわゆる「エンヴェロプ」）があり、初期バロック期のオリジナルの石積みが保存されています。同じ時期にさかのぼるものとして、長さ約3〜5メートルの地下聴音坑道（いわゆる「エカート」）も設けられました。これらは要塞の前面地帯へと延びており、防衛側が敵の築土作業の動向を監視するために用いられました。坑道の末端には豆を入れた太鼓が設置されており、太鼓の膜の上の豆が動き始めると、それは敵が近くで要塞の地下を掘り進めている明確な兆候とされました。敵は、バ스티オンの中で最も脆弱な部分である頂部を攻撃していました。脅威が生じた場合には、この坑道をさらに延長し、その末端に火薬を充填した、いわゆる爆破室（マイン・チャンバー）が設けられました。この部屋は封鎖されたうえで、爆破される仕組みとなっていました。このようにして、敵はバ스티オンに直接接近する以前に無力化され、要塞に脅威を及ぼすことはできませんで

した。床がブルノの煉瓦工場の税印（刻印）が押された近代煉瓦で造られたこの坑道の末端には、新しい階段が設けられています（その位置は、かつて木製の階段があった場所です）。この階段は、地下通路と周囲の地形とを結んでいます。

1809年、このバ스티オンはナポレオン皇帝の命令により砲撃を受けました。1960年代以降、シュピルベルク城にはブルノ市立博物館が置かれてきましたが、同館は長年にわたり、収蔵品のための保管スペース不足に悩まされていました。21世紀初頭、旧南西バ스티オンの跡地に新たな収蔵庫を建設することが決定されました。2002年には、考古学的監督のもとで土木工事が実施されました。この際、バ스티オンの基礎だけでなく、周囲回廊および地下聴音坑道も保存されていることが判明しました。そのため、この地下部分を要塞建築の貴重な証として一般公開することが決定されました。周囲の地形より13メートルの高さに達する新築建物（2006年完成）の最上部には、延床面積1,621平方メートルを有する、博物館収蔵品のための3階建て収蔵庫が設けられました。バ스티オンの二重構造は、主に彫刻、絵画、歴史的家具といった美術コレクションの収蔵に適した最適な環境を確保しています。

スウェーデン軍によるブルノ包囲戦は、この都市の歴史における最も重要な章の一つとされており、三十年戦争（1635〜1648年）の最終段階に位置づけられています。この戦争は1618年、当地において、いわゆる非カトリック諸身分によるカトリックのハプスブルク家に対する反乱として始まり、ヨーロッパ全域に及んだ最初の、そして最後の宗教戦争とされています。封建国家から成る二つの同盟が、互いに対峙していました。カトリック同盟（ハプスブルク君主国、ひいてはボヘミア王冠領を含む）と、プロテスタント同盟（その一例としてスウェーデン王国）です。



↑ バ스티オン内部の現在の様子

包囲戦への備え

敵軍到来以前の状況は不利でした。一部の貴族に加え、都市の軍事司令官であったシェンキルヒ男爵もまた、街から逃亡しました。そのため、1645年3月14日、ジャン＝ルイ・ラデュイ・ド・スーシュ大佐が、モラヴィアの首都ブルノの軍事司令官に任命されました。彼の任命は、ブルノ市民によってためらいをもって受け止められました。彼がフランス人であったこと（当時フランスはオーストリアの最大の敵国でした）、宗教的にプロテスタントであったこと、さらに数年前までスウェーデン軍で戦っていたことが、その理由として指摘されました。しかし、最終的な決定は皇帝によって下され、ド・スーシュは翌日から直ちに、都市防衛の準備に精力的に取り組み始めました。

戦略的理由から、彼は城壁から600歩以内にあるすべての建造物を取り壊すよう命じ、地形の凹凸をならし、城壁周辺の旧来の堀を掘り下げるとともに、新たな堀を掘削させました。彼は、いくつかの塔を解体することで、城壁修復のための建築資材を確保しました。スウェーデン軍の到来直前、彼はツェイル、トルニター、ノヴェー・サディの各郊外地区を焼き払うよう命じました。住民への食糧供給を確保するため、彼は牛引きの製粉所を建設させ、また市内のすべての井戸を清掃するよう命じました。彼はまた、いわゆるストラダ・コベルタ（屋根付き通路）によって、ブルノとシュピルベルクを結びました。それは、かつてのブルノ門（現在のシリングル広場に位置していました）とシュピルベルクの間に設けられ、現在でも一部が残されています。また、市内では武器や弾薬も不足していたため、ブルノの人々はそれらを製造するために懸命に働かなければなりませんでした。

守備側と敵軍の兵力規模

包囲戦開始当初、技術的・物資的装備が不十分であったことに加え、守備側の人数も決して十分とは言えない状況でした。5月初旬の時点で、ド・スーシュの指揮下にあった武装兵力は合計1,475人であり、そのうち正規兵はわずか426人に過ぎず、これにはシ

ュピルベルク要塞からのマスケット銃兵40人が含まれていました。残る部隊は、ブルノの市民、貴族、学生、職人、徒弟から構成されており、彼らは武器の扱いについて訓練を受けなければなりませんでした。

守備側の配置は次のとおりでした。シュピルベルクには389人の兵が配置され、ユダヤ門の守備には259人、ブルノ門には265人、ヴェセラー門には202人、ペトロフには133人の守備兵が置かれ、さらに聖トマス教会周辺の防衛には66人の学生が当たっていました。残る守備兵は、坑道掘削作業および損傷した要塞施設の修復に割り当てられました。

この少数の守備隊は圧倒的に不利な状況に直面していました。当時、スウェーデン軍は最大で2万8,000人の兵力を擁しており、さらに後には約1万2,000人が増援として加えられたのです。

シュピルベルク周辺の状況と戦闘

1630年代以降、シュピルベルクは、スコットランド出身のヤーコプ・ゲオルク・オギルヴィ中佐が指揮しており、彼は都市司令官であるド・スーシュ大佐の直接の指揮下にありました。当初、両者の関係は必ずしも良好ではなかったと伝えられていますが、状況が切迫する中で、やがて模範的な協力関係を築くようになりました。戦闘開始の直前、彼はシュピルベルクの屋根を取り壊させ、屋根付き通路の建設と要塞施設の改修に着手しました。

この要塞は、スウェーデン軍によって最も激しく攻撃された戦略拠点の一つであり、とりわけ屋根付き通路および西側の要塞施設（南西バ스티オン）が集散的に狙われました。

1645年5月13日、スウェーデン軍の工兵がバスティオンの直前まで掘り進み、城壁の下に坑道を掘って爆破を試みようとしていることが判明しました。その結果、ジャン＝ルイ・ラデュイ・ド・スーシュは対坑道（爆破室を備えた地下坑道）の建設を命じ、ブルノから建築職人、石工、大工を招集しました。

を受け、周辺のいくつかの村落（現在のザーブルドヴィツェ、マロムニェジツェ、ジデニツェ、ユリアーノフの各市区を含む）は焼き払われ、住民が離散しました。ブルノの防衛の成功は、結果としてウィーンを危機から救うことにつながりました。オーストリア皇帝フェルディナント三世は、ブルノのこの英雄的行為を忘れることなく、守備兵および都市に対して寛大な恩賞を与えました。

1646年、皇帝は、いわゆる「スウェーデン特権」を公布し、これによりブルノは国税から3万枚の金貨を受け取るとともに、5年間にわたって債務返済を免除され、さらに軍隊の宿 を受け入れる義務からも解



↑ 1645年のスウェーデンによるブルノ包囲戦

1645年8月15日の都市への総攻撃

トルステンソンは、主攻撃の日程を8月15日に決めました。実際の戦闘行動に先立ち、午前5時から午後4時まで激しい砲撃による準備射撃が行われ、途中、激しい降雨のために二度の短い中断を余儀なくされました。砲撃によって要塞施設は大きな損害を受け、とりわけペトロフ地区でその被害が甚大でした。

午後5時から6時の間に、スウェーデン軍は市内6か所で総攻撃を開始しました。

攻撃地点は、ペトロフ、ユダヤ門周辺（現在のマサリク通り起点、中央駅近く）、イエズス会学院背後、聖トマス教会背後、シュピルベルク、そして屋根付き通路でした。ペトロフをめぐる戦闘は九二時間に及び、その間、守備側はスウェーデン軍による三度の攻撃を撃退しました。守備側は、ユダヤ門およびシュピルベルクにおいても、同様に成功を収めました。最も危機的な状況に陥ったのは、聖トマス教会周辺でした。ここでは、攻撃側の一部が市壁を突破することに成功しました。まさに土壇場で50名の竜騎兵が介入し、敵の勝ち進む勢いを食い止めました。激しい戦闘は夕刻に終結し、スウェーデン軍は翌日から徐々に撤退を開始しました。

放されました。この都市には、拡張された紋章が授与され、その簡略化された形は、現在もブルノ中心区で使用されています。

ジャン＝ルイ・ラデュイ・ド・スーシュは将軍に昇進し、3万枚の金貨を授与されました。彼はこの資金の一部を用いて、現在の自由広場にある邸宅（いわゆる「リペー諸侯の館」）を購入しました。ヤーコプ・ゲオルク・オギルヴィは大佐に昇進し、シュピルベルクの終身司令官に任命されました。防衛戦に参加した市民および農奴は、6年間にわたり、すべての税負担および賦役から免除されました。ブルノは、モラヴィア全域の行政の中心となりました。

↓ ASPETTO ATTUALE DEGLI INTERNI DEL BASTIONE



muzeumbrna.cz ↗
Facebook @muzeumbrna
Instagram @muzeumbrna

#hradspilberk
#vilatugendhat
#meninskabrana
#arnoldovavila
#vilawittal

MMZ Muzeum města Brna

1645年におけるスウェーデン軍によるブルノ包囲戦の結果とその影響

実に112日間に及ぶ包囲戦の末、ブルノはスウェーデン軍の圧倒的な兵力差にもかかわらず防衛に成功し、8月23日、敵軍はブルノから撤退しました。戦闘の過程で、守備側は約250人、スウェーデン軍はおよそ8,000人の戦死者を出しました。戦闘およびそれに伴う火災の結果、都市そのものは甚大な被害